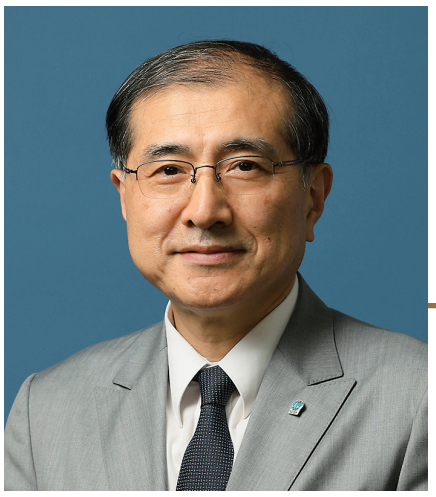
ACS日本支部ニュース
NEWSLETTER FROM THE JAPAN CHAPTER OF AMERICAN COLLEGE OF SURGEONS
2024. Apr. Vol.15

主な内容

ACS Japan Chapter President/Governorご挨拶 …… P1
ACS名誉会員になって思うこと… P2
ACS International Guest Scholarshipを経験して …… P4
ACS Fellowとして感謝と決意… P5
Owen H. Wangensteen Scientific Forum Excellence in Research Award recipient、そして新FellowとしてACSに参加して …… P6
College President Visits ACS Japan Chapter …… P7



ACS Japan Chapter President/Governor ご挨拶

国立国際医療研究センター理事長
東京大学名誉教授

國土　典宏

Norihiro Kokudo, MD, PhD, FACS, FRCS

2024年は元旦に能登半島地震が発生しました。犠牲となった方のご冥福を祈りますとともに被災された方々にお見舞い申しあげます。当支部会会員の中にも被災された方、DMATなど現地で活動されている方もいらっしゃると思います。皆様のご苦労にこの場を借りて敬意を表します。

さて、2023年を振り返りますと、3年以上続いた新型コロナ感染症パンデミックもようやく落ち着き、学会も通常の形に戻ってきました。4月には東京で開催された第123回日本外科学会学術集会期間中にACS日本支部年次総会をついにコロナ禍後初めて現地開催することができ、早朝にもかかわらず47名の会員の皆様の参加をいただきました。またACSのEllison会長も来日され、支部会で“American College of Surgeons Initiatives to Promote Quality Surgical Care”と題する講演をしていただきました（写真1）。会場を提供いただいた大木隆生日本外科学会会頭に改めまして厚く御礼申し上げます。コロナ禍後初めてのACS会長日本訪問ということで、Ellison会長ご自身も日本滞在を満喫された事をACS HPの記事で報告されていました。

写真1：ACS日本支部年次総会
（2023年4月27日　東京にて：前列向かって左からEllison ACS会長、著者、大木隆生日本外科学会会頭）

写真2：Japan Chapter情報交換会
（2023年10月23日　ボストンにて：前列中央白いジャケットがHenri R. Ford新ACS会長）

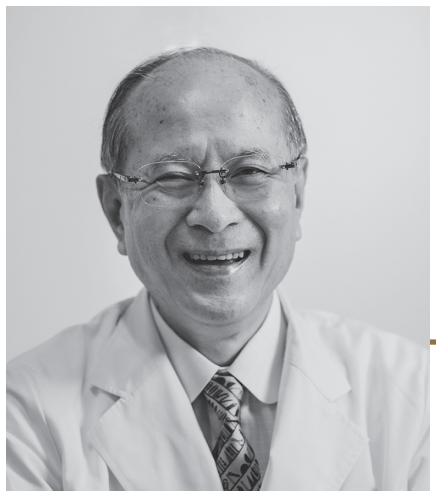
10月にはボストンでACS Clinical Congressが開催されました。日曜夜のConvocationでは多くのNew Fellow（Initiates）が誇らしい顔で入場し、その中には日本からの18人のInitiatesのうち何人かの先生方も含まれていました。またHonorary Fellowとして日本からは森 正樹先生が選出され、壇上で表彰されるという栄誉がありました。森先生、誠におめでとうございます。また、月曜夜には恒例のJapan Chapter情報交換会を開催し、約50名の皆様に参加いただきました。今回も香港や米国アイダホ州Governorなどの外国人ゲスト、米国で活躍されている日本人の外科医やその家族の方にも参加いただき賑やかな会となりました。さらに、驚いた事に何とACS新会長Henri R. Ford先生がひょっこり訪問くださり早速交流することができました（写真2）。Ford会長には今年4月名古屋の日本外科学会への参加が決まっておりますので、本支部会でもお話をいただければと思っています。日本支部総会の詳細につきましては改めてご案内しますので是非ご参加ください。

私自身はGovernorの一人としてInternational Relations Committee, Governors Chapter Activities International Workgroupのメンバーとして引き続き活動させていただいています。その中でACSの国際戦略としてのNational Chapterの拡大と活性化、低所得国へのoutreach、International Fellowshipの推進等に協力しています。先ほど触れましたように昨年日本からは18名のNew Fellowが誕生しました。ACS fellowは年間を通して募集されています。先生方の教室、同門、職場の後輩の皆様に是非お声掛けください。

最近の円安と航空運賃やホテル滞在費の高騰で海外の学会に参加しづらい状況が続いていますが国際的発信と交流の場としてACSを最大限活用いただければと思います。本年10月にはサンフランシスコでACS Clinical Congress 2024が開催予定です。サンフランシスコでお会いできることも楽しみにしております。

略　歴

1981年	東京大学医学部医学科卒業、同第二外科研修医
1987年	東京大学第二外科助手
1989－91年	米国ミシガン大学外科留学
1995年－	癌研究会附属病院　外科医員（2001年　同医長）
2001年－	東京大学肝胆膵外科　助教授
2007年－	東京大学肝胆膵外科・人工臓器移植外科　教授
2017年－	国立研究開発法人国立国際医療研究センター　理事長（現在に至る）
2012－16年	日本外科学会理事長
2018年	第118回日本外科学会会頭
2015－17年	A-PHPBA President
2020－22年	IHPBA President



ACS名誉会員になって思うこと

東海大学副学長／医学部長
森　正樹
Masaki Mori, MD, PhD, FACS

2023年10月22日に、ACSの第103代会長（2022～2023年）であるChristopher Ellison先生より荘厳なConvocation Ceremonyの中でACS Honorary Fellowshipを授与されました（図1）。私にとっては大変光栄な事でありがたく思っています。また、今回の会場はボストンでしたが、私は1991年から翌年にかけて同地に留学していましたので、特別な感慨がありました。2023年はアメリカ、カナダ以外から私を含めて7名の方がこの栄誉に浴することになりました。

ACS Honorary Fellowshipの授与は、ACSの設立時の1913年に始まったようです。その選出基準として、米国（およびカナダ）外で診療を行い、外科または医学の分野で国際的な名声を博し、卓越した人道的サービスを提供してきた者ということになっているそうです。私の場合は素晴らしい先輩、同輩、後輩に恵まれたおかげで、この栄誉を授与されました。一緒に勉強してきた皆様に心から感謝申し上げます。

さて、ACSに参加するたびに思うことですが、ACSはdiversityに特別な注意を払っています。第104代会長（2023～2024年）のHenri Ford先生は、会長就任演説の中でdiversityについて時間をかけて講演されました。彼自身、ハイチ出身で、13歳までハイチで暮らした後アメリカに移住した経歴を有しているために、その思いが強いのかもしれません。彼の講演によるとアメリカの大学において女性として初めて外科の主任教授(チェアマン)になったのは、オハイオ州立大学のOlga Jonasson先生であり、1993年のことでした。現在では全米で20名以上の女性外科医がチェアマンとなっています。ACSの理事として初めて選出された女性外科医は1993年のMargaret Longo先生、ACSの最初の女性会長は2005年のKathryn Anderson先生です。ちょうど30年ほど前から女性外科医をリーダーとして積極的に登用しようとする機運が盛り上がったようで、この3名の方はその嚆矢となった方として紹介されました。Diversityの問題は女性に限ったことではありません。黒人外科医の登用も積極的に行うようになり、1995年にはLaSalle Leffall先生が黒人として初めてACS会長に就任しました（図2）。その後、黒人の会長は2003年のClude Organ Jr.先生、2010年のL.D.Britt先生、そして2023－2024年のHenri Ford先生と繋がっています。他方、女性の会長はAnderson先生に続き、2011年のPatricia Numann先生、2017年のBarbara Lee Bass先生、2019年のValerie Tusch先生、2021年のJulie Freischlag先生へと繋がっています。今年はACSのCEOに初めて黒人女性外科医が就任しました。Patricia Turner先生ですが、彼女は学会期間中、大変積極的に会場内を動き回り、運営に携わっているのが印象的でした。

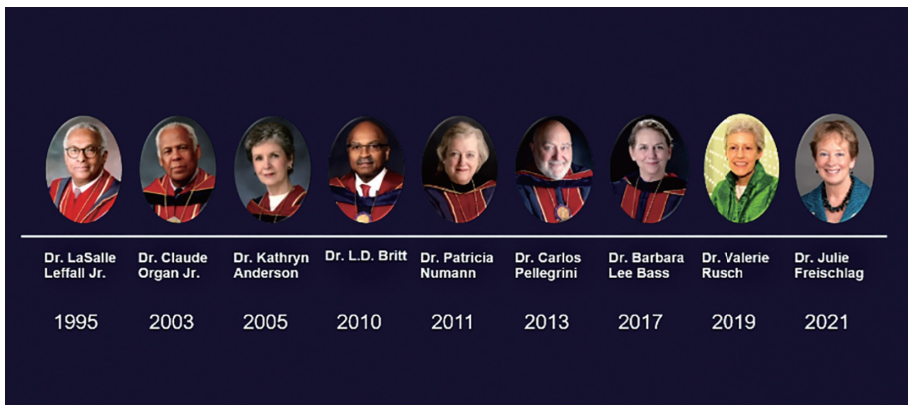


図2：ACSの会長に就任したマイノリティーの方々（Henri Ford先生の講演より抜粋）

さて、現在、ACSの女性会員は約9万人の13％を占め、2023年のnew fellowでは30％を占めたようです。翻って日本外科学会（JSS）は会員数が4万人強とACSの半数程度であり、会員数と新規会員数に占める女性外科医の割合はACSと似たような状況と思います。しかしながらJSSでは女性外科医が代議員や理事になる事は少なく、私が理事長に就任した2017年は、代議員は数名、理事は0でした。ACSはもとよりその他の国々の外科学会でも女性の役員がいない国は、ほとんど見当たらず、大変な危機感を覚えました。そこで女性外科医を積極的に登用しようと理事会に提案し、活動を開始しました。一般社団法人の定款上、代議員を女性限定で増やすことは難しいことが分かったため、先ずはそのような制限のない理事を2名登用することになりました。その後、代議員についても私の後任の池田徳彦理事長がリーダーシップを発揮され、近々に約40名増やすことが決まりました。今後は形の上だけではなく実際の運営上も女性外科医が活躍できるように仕向ける努力を継続することが重要と思います。ACSからは教わることが多いですが、逆にJSSから教えることができるようになることも大事と思います。皆様の活躍がその礎になりますので、日本と世界の外科学の発展のために頑張ってください。皆様のご健勝とご発展を祈念しています。

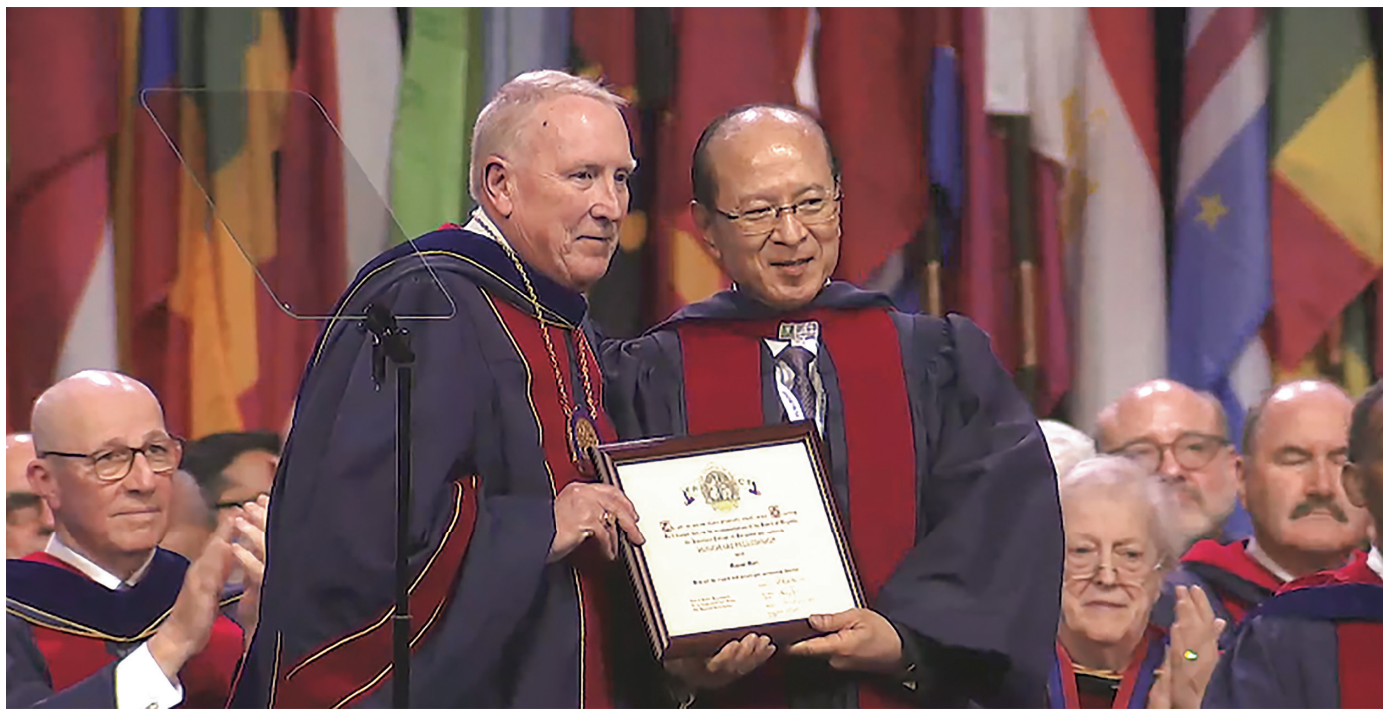


図1：Ellison会長から名誉会員証を授与される

略　歴

学　歴
昭和55（1980）年 3 月　九州大学医学部卒業
昭和61（1986）年 3 月　九州大学医学系大学院（病理学）修了

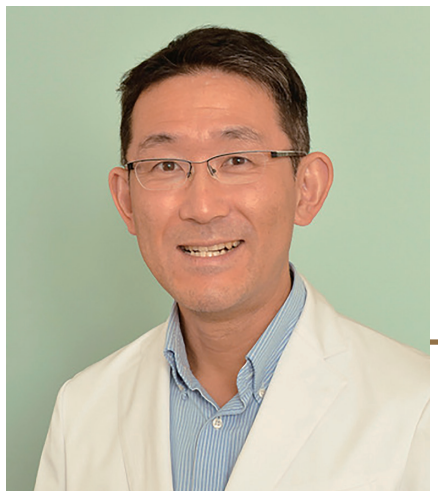
職　歴
昭和55（1980）年 6 月　九州大学医学部第二外科入局
平成 3 （1991）年 4 月　アメリカ合衆国ハーバード大学留学
平成10（1998）年 4 月　九州大学生体防御医学研究所教授
平成20（2008）年 4 月　大阪大学大学院消化器外科教授
平成30（2018）年10月　九州大学大学院消化器・総合外科教授
令和 3 （2021）年 4 月　東海大学医学部長（大阪大学名誉教授・九州大学名誉教授）
令和 4 （2022）年 4 月　東海大学副学長／医学部長

主な所属学会
日本医学会　（副会長2019 ～ 2023年）
日本医学会連合　（副会長2017 ～ 2023年）
日本外科学会　（理事長2017 ～ 2022年）
日本消化器外科学会（理事長2011 ～ 2015年）
日本癌学会　（副理事長2016 ～ 2022年）
Honorary Fellow of the American Surgical Association（2018年～）
Society of Surgical Oncology（Executive Council　2018 ～ 2023年）
中南大学（中国）名誉教授（2018年～）
Honorary Fellowship of the American College of Surgeons（2023年）

資　格
日本内視鏡外科学科技術認定医（大腸）（2011年～）
Da Vinci Certificate（Console surgeon）（2018年～）

主な役員など
日本学術会議会員（2014 ～ 2020年）
日本医療研究開発機構（AMED）　プログラムオフィサー（2015 ～ 2016年）
医薬品医療機器総合機構（PMDA）科学委員会委員（2012 ～ 2016年）

主な賞
小林がん革新的研究表彰（2009年6月）
日本医師会医学賞（2010年11月）
高松宮妃癌研究基金学術賞（2013年2月）
佐川特別賞（2013年11月）
日本癌学会長與又郎賞（2019年9月）
Charles Balch Distinguished Service Award
（Society of Surgical Oncology USA 2020年8月）
日本癌治療学会中山恒明賞（2020年2月）
紫綬褒章（2020年4月）など



ACS International Guest Scholarshipを経験して

がん研有明病院　形成外科

矢野　智之

Tomoyuki Yano, MD, PhD, FACS

はじめに

今回このような過分な賞を頂戴し、その経験についての執筆の機会をいただきまことにありがとうございます。現在、がん研有明病院形成外科に勤務し、頭頸部再建、乳房再建を始めとしたマイクロサージャリーを用いた再建外科を専門にしています。

クリニカルフェローシップをベルギーで経験し、がん研有明病院形成外科にてInternational Fellowshipプログラムを運営するように、医療の国際交流の掛け橋になるべく活動しています。

このような背景がある中で海外における臨床力の証としてFellow of American College of Surgeons（FACS）があるので挑戦してみてはどうかとのお声掛けをいただき2015年シカゴにてFACSを取得いたしました。

International Guest Scholarshipの経験

ACSのメーリングリストからInternational Guest Scholarshipの公募があることを知りました。今後外科系医師としてキャリアを構築する中で、米国もしくはカナダに赴き現地医師と相互交流し、ネットワークを作るといった今後の発展をサポートする内容でした。再建外科領域における医療機器開発に関わり、実際にマイクロサージャリー用ロボットの開発や日本形成外科学会の形成外科ロボット手術検討委員会にも所属する中で、医療機器開発の本場でもあり、手術用ロボットの臨床応用の先駆けでもあるアメリカとの関わりを持てることに大きな魅力を感じました。外科の先生方に比べると歴史が浅い形成外科領域からの応募であり、実際にはほとんど自信がなかったため、ACSから受賞の連絡を頂いた際には大変驚き、一方で日本の形成外科医を代表してこのような賞を頂けたことは、大きなチャンスであるとともに、大変な責任もあると感じました。

写真1：メンターとして多くのサポートをいただいた川瀬先生と式典時に撮影

東京慈恵会医科大学乳腺外科の川瀬和美先生がメンターとしてついていただき（写真1)、MD Anderson Cancer Centerへの訪問の機会を作ってくださりました。また米国における乳房再建へのロボット手術の導入で活躍されているWest Penn HospitalのAndrea Moreira先生を訪問する機会も得ることができました。

川瀬先生の御助言とサポートを頂きながらACSのAnnual meetingの前に各々の施設を1週間ずつ訪問する形でスケジュールを組みました。MD Andersonでは形成外科医のJohn shuck先生が手術用ロボットを用いた乳房再建のためのDeep Inferior Epigastric artery Perforator（DIEP）flap採取への応用、骨盤底再建のための腹直筋皮弁採取への応用について、実際の手術を細かに見せていただきました。Department DirectorのPeirong Yu先生よりGround Roundの機会をいただき、1時間の講演をすることもできました（写真2)。

写真2：MD Anderson Cancer CenterにおけるGround round後の集合写真。筆者左がPeirong Yu教授、右がJohn Shuck先生

West Penn Hospitalでは残念ながら予定されていたDa Vinciを用いたDIEP flapの手術のうち1件が患者都合で中止、もう1件が当日に別診療科が悪性腫瘍切除で急遽使うことになり見学の機会を失ってしまいました。手術用ロボットの優先順位がどの手術にあるかなどが問題になっていることを知りました。Moreira先生は米国形成外科学会のロボット導入タスクフォースの主要メンバーになっており、米国での承認プロセスの実際や苦労についてもお話を聞くことができました。

これらの経験をまとめ、10月にボストンで開催されましたACS Annual meetingにてInternational Guest Scholarshipの受賞式と報告発表を行なってきました（写真3)。私のScholarshipの資金はMoosa家の寄付からまかなわれており、寄付者との昼食会も開催され、米国の寄付文化の素晴らしさも感じました。この寄付文化は何かしらの形で、是非日本にも導入し、根付かせたいと思うものがあります。

写真3：ACS Annual meetingにおけるInternational Guest Scholar授賞式

最後に

今回のScholarshipを通じて米国の再建外科との新たな強固な繋がりができたことが非常に大きな収穫です。患者様、日本形成外科学会、ACS Japan Chapterの先生方に必ずしや還元できるものを感じています。

最後にFACS就任の際に御推薦をいただきました先生方、治療と研究における力強い仲間のがん研有明病院形成外科、メンターとしてサポート頂きました川瀬先生、外科系医師としての指針について常日ごろより御助言をくださる國土先生に深く感謝の意を示します。

略　歴

平成12年3月　東京医科歯科大学医学部卒業
12年5月　東京医科歯科大学医学部附属病院　形成外科入局・同研修医
15年6月　国立がんセンター東病院　頭頸科レジデント・形成外科医員
19年4月　東京医科歯科大学医学部形成外科　医員
25年4月　横浜市立みなと赤十字病院病院　形成外科　副部長
28年4月　ベルギー　ゲント大学形成外科　留学（フェロー）
29年5月　がん研有明病院　形成外科医長
令和元年8月～現在　がん研有明病院　形成外科部長、医療機器開発部部長兼任

ACS Fellowとして感謝と決意

国立病院機構　九州がんセンター　消化管外科　医長
木村　和恵
Yasue Kimura, MD, PhD, FACS

2023年10月、Bostonで開催されたClinical Congressにて新たにFellowに任命されました。Fellowになることをお勧めくださいました先生方、ご推薦いただきました先生方、そしてConvocation Ceremonyに参加を勧めてくださった先生方に心より感謝申し上げます。このたび、ACS Fellowとして皆様のお仲間にいれていただきありがとうございます。COVID-19による移動制限により海外出張も縁遠くなっていましたが、Convocation Ceremonyへの参加がかない、その場でガウンを纏い、特別な瞬間を共有できたことに深く感激しております。

Ceremonyが進行する中で、ACSの理念である“To Heal All with Skill and Trust”のもと、Fellowship Pledgeを奉読させていただきました。外科医としての経験は既に20年以上に及びますが、その瞬間において、非常に厳かな気持ちになり、ACS Fellowになることの光栄さや外科医としての自負を改めて実感しました。PresidentのDr. Fordのスピーチの中で、ACSのdiversityの推進がテーマの1つとして取り上げられ、多人種・女性のFellow、Presidentの誕生について語られました。現在ACSの女性Fellowは13％程度ですが、2023年の新Fellowでは女性の割合が30％になり、非常に進歩した状況であることを述べられると、フロアの新Fellowからも大きな拍手が起こりました。アメリカでは女性外科医師の割合も多い印象があったため、少し意外に感じました。ACSの永年にわたるdiversityへの取り組みにより達成された結果であることを理解するとともに、我が国はまだこれからですが、参考になることも多くあるのではないかと思いました。

私が外科医になった頃、今では当然のように行われている腹腔鏡手術が消化器外科領域に導入されつつある時期でした。今では開胸・開腹手術から急速に胸腔鏡・腹腔鏡手術へと進化し、更にはロボット手術が急速に広まっています。虫垂炎や胆嚢摘出をほぼ腹腔鏡で行い、開腹手術は教科書でしか見たことないという若い外科医も少なくありません。消化器外科領域では今後、腹腔鏡手術よりもロボット手術が一般的になるかもしれません。この20年で手術技術が大きく変化した背景には、患者の治療成績への寄与だけでなく、外科医自身がそのメリットを大いに感じたことが理由として考えられます。一方、進化した手術技術とは裏腹に、外科医のdiversityや労働環境は20年前と比べほとんど変わっていません。働き方改革は数年前から実施にむけて様々な取り組みが行われており、2024年4月から本格的なスタートが切られます。また、diversityへの関心とその推進活動も徐々に拡大しています。技術の急速な変化と同様に、これらの取り組みにより数年のうちに皆の意識が変わり、当たり前のように広がっていくことを期待します。

Japan chapterの情報交換会では、海外で活躍中の先生方からアメリカの医療現場における実際の経験について貴重なお話を伺うことができました。日本の医療との違いだけでなく、異なる専門分野の視点からの知識を得ることができ、非常によい刺激になりました。自身はもう若くはないのですが、若い医師にはとても有意義な機会になるだろうと思われます。

また、Bostonは初めての訪問だったため、後輩の留学先のラボを見学させてもらったり、ハーバード大学の構内を散歩したり、と楽しい時間も過ごさせていただきました。

今回ACS Fellowとなり、外科医として医師としてまだ学ぶべきことがたくさんあることを実感しました。ACSの一員としてモチベーションを新たにし、一層の努力を重ねていきたいと考えています。今後ともご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

略　歴

職　歴

1998年3月	大分医科大学　医学科卒業
1998年4月	九州大学第二外科
2000年4月	九州大学大学院医学系学府（臓器機能医学）入学
2004年3月	同上　卒業（医学博士）
2004年4月	済生会唐津病院
2009年4月	飯塚病院　外科
2011年4月	広島赤十字原爆病院
2012年4月	九州大学　がん分子病態学講座　助教
2012年6月	九州大学　消化器・総合外科　助教
2013年5月	国立病院機構　九州医療センター
2015年4月	飯塚病院　外科　診療部長
2019年4月	九州大学大学院　消化器・総合外科　診療講師
2020年6月	九州大学大学院　先進がんゲノム検査共同研究部門　准教授
2023年4月	国立病院機構 九州がんセンター 消化管外科 医長

Owen H. Wangensteen Scientific Forum Excellence in Research Award recipient、そして新FellowとしてACSに参加して

京都府立医科大学　消化器外科

今村　泰輔

Taisuke Imamura, MD, PhD, FACS

2023年度、ACS Fellowの授与を賜り、新FellowとしてACSに参加する機会を得たことに心からの感謝と光栄の念を抱いております。この場を借りて、推薦してくださった先生方、並びにACS Japan Chapterの皆様に深く感謝申し上げます。

Covid-19感染拡大に伴い、国内外の学会が現地での参加が困難になりました。思い返せば、コロナ禍前の最後の海外学会の参加は2017年のサンディエゴで開催されたACSでした。その後、国際学会への参加は叶わず、今回6年ぶりにACS現地参加が実現しました。参加するにあたり、過去に先輩の付き添いで参加したConvocation ceremonyに、今回は新Fellowとして自ら参加することになりました。自らが重厚なマントを纏い、厳かな場に立つと、自然と背筋が伸び、湧き上がってくる誇りを感じるような特別な体験となりました。

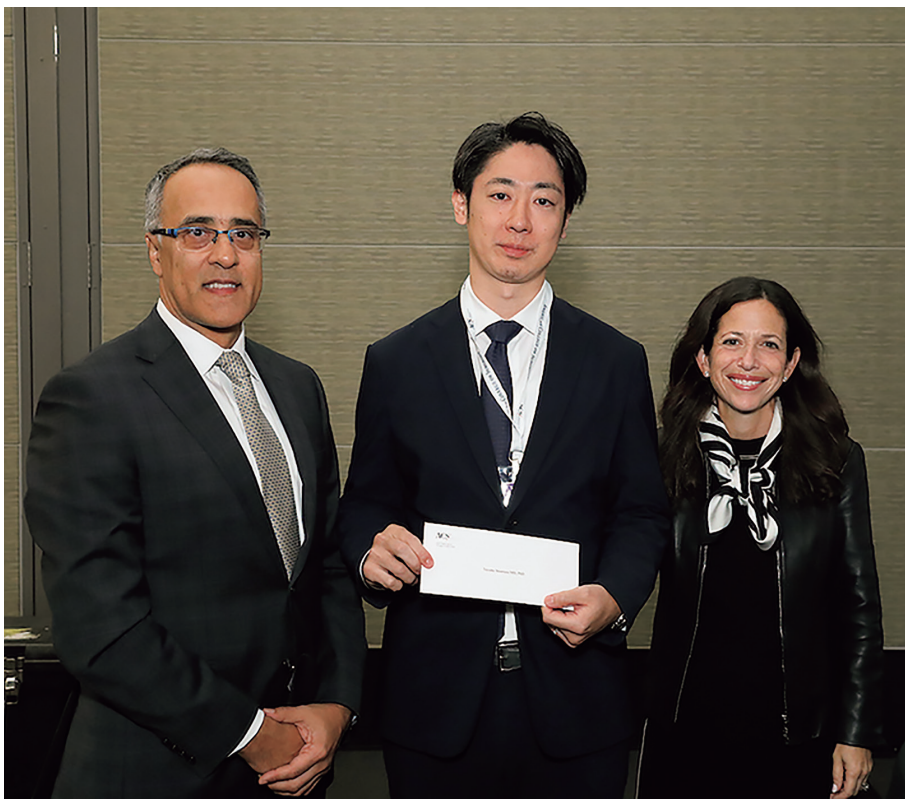
私は平成21年に京都府立医科大学を卒業後、同大学の消化器外科教室に入局しました。外科医としての修練を経て、平成26年に大学院に進学し、膵癌のリキッドバイオプシーに関する研究を開始しました。膵癌患者の血液中のがん抑制型microRNAがバイオマーカーとして有用で、さらにこのマイクロRNAが抗がん核酸治療として期待できるという知見を得て、2017年のサンディエゴで開催されたACSで発表し、e-Poster of Exceptional Merit, International best e-posterに選出されました。研究成果が国際的にも評価されたと考え、これを機に膵癌のリキッドバイオプシーを基にした個別化治療の確立が私自身のAcademic surgeonとしての目標であると考えるようになりました。

その後、静岡がんセンターで5年間、肝胆膵外科の修練を積みました。高度技能専門医を目指した臨床修練と並行して、臨床研究、基礎研究に励みました。臨床研究としては、膵癌の切除可能性分類の再評価（Brt J Surg, 2019）、リンパ節郭清効果Indexを用いて至適リンパ節郭清範囲の検討（ASO, 2020）を報告しました。また膵癌や胆道癌の補助療法試験において無再発生存は全生存の代替エンドポイントとして有用であることを報告しました（Ann Surg, 2023）。今後の周術期補助療法開発を促進し予後改善にも寄与しうる知見と考えております。静岡がんセンターは日本版Cancer Genome Atlasの樹立を目指し切除標本のマルチオミックス解析、リキッドバイオプシー開発のための血漿解析を行っておりました。今回のACSでは、膵癌における腫瘍組織と血漿中の循環腫瘍DNAの網羅的シークエンス解析の結果を紹介し、これがOwen H. Wangensteen Scientific Forum Excellence in Research Awardに選出される栄誉に浴しました。この賞は、採択された1429の抄録中わずか24演題に与えられるものだそうで、この研究が国際的にも評価されたことを大変嬉しく思います。静岡がんセンターでの修練の後に無事に高度技能専門医を取得させていただき、令和5年より京都府立医科大学に帰学し、肝胆膵外科の診療に従事しながら、研究準備に着手しているところであります。

膵癌克服に向けたリキッドバイオプシーバイオマーカーの開発、マルチオミックス解析を通じた個別化治療の推進は、私のライフワークです。これまでの経験と今回のACSでの受賞が、この道の更なる進展を後押ししてくれるものと確信しています。そして研究のみならず、最適な手術の探求も個別化治療の不可欠な構成要素であり、膵癌克服のために外科医である我々にのみ課される固有の使命です。ロボット支援手術に代表される先進的な手術手技の普及に伴い、私たち外科医は技術の習得と教育環境の充実に努める必要があります。今回のACSで、日本とアメリカの手術技術や教育環境の違いを改めて実感しました。この経験を踏まえ、アメリカの臨床現場での最先端手術技術や教育方法を学ぶことに、より一層の関心を持つようになりました。今後そのような機会を得て、自身の技術向上と後進の教育に積極的に活用したいと考えています。

今回の会期中のJapan Chapter情報交換会は、米国で活躍される先生方との再会や新たな出会いがあったことは、大変楽しく、刺激的であり、モチベーションを高める素晴らしい機会となりました。そして、これらの交流は私自身にとって他にない貴重な機会であり、このようなネットワークを維持し、さらに発展させていくことのFACSとしての責任を再確認しました。今後も同僚と共にACSに参加し、研究成果を発表すると同時に、こうした貴重なご縁を大切にし、さらなる学びと成長の機会として活かしていきたいと思います。

最後に、この度の機会を与えていただいたACS Japan Chapterの皆様に心からの感謝を申し上げます。今後も引き続きご指導ご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。



Owen H. Wangensteen Scientific Forum Excellence in Research Award授賞式の様子

略　歴

平成21年3月	京都府立医科大学　医学部　卒業
平成21年4月	社会保険神戸中央病院　臨床研修医
平成22年4月	京都府立医科大学附属病院　臨床研修医
平成23年4月	社会保険神戸中央病院　前期専攻医
平成25年4月	京都府立医科大学　消化器外科　後期専攻医
平成26年4月	京都府立医科大学大学院医学研究科消化器外科学 入学
平成30年3月	京都府立医科大学大学院医学研究科消化器外科学 修了
平成30年4月	静岡県立静岡がんセンター　肝胆膵外科　レジデント
令和4年4月	静岡県立静岡がんセンター　肝胆膵外科　チーフレジデント
令和5年4月	京都府立医科大学附属病院　消化器外科　病院助教

College President Visits ACS Japan Chapter

ACS前会長
E・クリストファー・エリソン
E. Christopher Ellison, MD, FACS, MAMSE
Former President of the American College of Surgeons

From April 26 to April 29, 2023, I visited Tokyo, Japan, and participated in meetings of the Japan Chapter of the ACS and the Japan Surgical Society (JSS). My hosts from the Chapter were Norihiro Kokudo, MD, PhD, FACS, and Kiyoshi Hasegawa, MD, PhD, FACS.

I was impressed with the engagement of the Japan ACS Chapter. The chapter has 520 members, of which 433 identify as general surgeons and 493 are male. Surgery in Japan is a male-dominated specialty; however, there are an increasing number of women surgeons and an interest in expanding that number in the future. To this point, the person assigned as my guide on various tours was Nami Yamashita, MD, PhD, a general and breast surgeon. She completed a postdoctoral research fellowship at Dana Farber Cancer Institute in Boston, Massachusetts.

With my hosts, I visited Kamakura, which was the de facto capital of Japan from 1185 to 1333 as the seat of the Kamakura shogunate and became the nation's most populous settlement during the Kamakura period. The Kamakura period was marked by a gradual shift in power from the nobility to landowning military men in the provinces. This era was a time of dramatic transformation in the politics, society, and culture of Japan.

I also visited the site of Edo Castle. Edo Castle was continually expanded and rebuilt over the centuries but was severely damaged by fires between the 17th and 19th centuries. The complex is currently the Tokyo Imperial Palace. The Edo period refers to the years from 1603 until 1868 when the Tokugawa family ruled Japan. The era is named after the city of Edo, modern-day Tokyo, where the Tokugawa shogunate had its government. It is also sometimes referred to as the early modern period because it was at this time that many of the characteristics of modern Japanese society were formed.

According to my discussions, the main issues facing surgeons in Japan include variable reimbursement and a resulting shortage of surgeons. The JSS is a robust organization with more than 40,000 members. This year's president, Takao Ohki, MD, PhD, is a vascular surgeon, and his theme for the meeting was "Higher and Further Together." My hosts were Masaki Mori, MD, FACS, and Norihiko Ikeda MD, PhD.

This meeting, which was the first in-person meeting since the pandemic, was well attended. During the 3-day meeting, there were more than 3,000 scientific papers, many featuring the work of trainees. The quality of the basic and clinical science was exceptional. Sessions on robotic surgical outcomes were very popular and well attended. The focus on quality outcomes was clear, and there is renewed enthusiasm to incorporate NSQIP. I ended my visit with a tour of Keio University School of Medicine and University Hospital provided by Masashi Takeuchi, MD, PhD.

I am extremely grateful for the opportunity to visit Japan and the kindness and hospitality of my hosts. No matter where I visit, I am always impressed by the commitment of our fellows to the ACS mission and values.

Biography

E. Christopher Ellison MD is Robert M Zollinger Professor of Surgery Emeritus in the department of surgery at The Ohio State University College of Medicine. He is recognized as one of the best doctors in the US. He previously served as the President and CEO of the Ohio State University Physicians Practice Plan and was a founding member of that organization. He served as Interim Dean of the OSU College of Medicine from 11-15-14 to 8-31-16 and Chair of Surgery 2000-2013. He was previously recognized as the College of Medicine Distinguished Professor. Dr. Ellison received his undergraduate degree from the University of Wisconsin in 1972 and his medical degree from the Medical College of Wisconsin in 1976. He returned to Columbus for general surgery residency at Ohio State. Dr. Ellison then joined the university in 1984 as assistant professor. In 1987 he entered community practice in Columbus and then returned to the Ohio State University to direct the Division of General Surgery and also served for six years as director of the general surgery residency program. In 2000 he was named as Chair of the Department and served until April 2013. During his tenure as Chair of Surgery he oversaw the expansion of the department and creation of a multidisciplinary basic science and clinical research programs in the Department of Surgery. His clinical interests include pancreatic cancer, gallbladder disease and the Zollinger-Ellison Syndrome. He has published over 160 peer reviewed articles. He is principal author with Robert M. Zollinger Jr of the 10th Edition of Zollinger's *Atlas of Surgical Operations* published in April 2016. He is an Associate Editor of Fischer's *Mastery of Surgery, 7th Edition.*

Better Health, Brighter Future

タケダは、世界中の人々の健康と、
輝かしい未来に貢献するために、
グローバルな研究開発型のバイオ医薬品企業として、
革新的な医薬品やワクチンを創出し続けます。

1781 年の創業以来、受け継がれてきた価値観を大切に、
常に患者さんに寄り添い、人々と信頼関係を築き、
社会的評価を向上させ、事業を発展させることを日々の行動指針としています。

武田薬品工業株式会社
www.takeda.com/jp

Takeda

New Fellows 新入会員名簿

Taisuke Imamura	今村　泰輔 （京都府立医科大学消化器外科）
Tatsuhiko Kakisaka	柿坂　達彦 （北海道大学病院消化器外科Ⅰ）
Junichi Kaneko	金子　順一 （東京大学肝胆膵外科・人工臓器移植外科）
Kazuhisa Kaneshiro	金城　和寿 （浜の町病院外科）
Hiroshi Katoh	加藤　弘 （北里大学病院乳腺甲状腺外科）
Yasue Kimura	木村　和恵 （九州がんセンター消化管外科）
Jun Kiuchi	木内　純 （京都府立医科大学消化器外科）
Kazuhiro Koikawa	肥川　和寛 （聖マリア病院外科）
Takeru Matsuda	松田　武 （神戸大学大学院食道胃腸外科・低侵襲外科）
Kosuke Mima	美馬　浩介 （熊本大学病院消化器癌先端治療開発学）
Katsuhiro Ogawa	小川　克大 （熊本大学大学院消化器外科学）
Hiroshi Sawayama	澤山　浩 （人吉医療センター外科）
Tomoyoshi Takenaka	竹中　朋祐 （九州大学大学院消化器・総合外科）
Masayuki Tanaka	田中　真之 （慶應義塾大学医学部一般・消化器外科）
Taiji Tohyama	藤山　泰二 （倉敷成人病センター外科）
Daisaku Yamada	山田　大作 （大阪大学大学院消化器外科学）
Kensuke Yamamura	山村　謙介 （済生会熊本病院外科）
Kenji Yoshino	吉野　健史 （神戸市立西神戸医療センター外科・消化器外科）

事務局便り

COVID-19 感染症が昨年５月より５類に移行しました。当時はどこまで「コロナ前」に戻るのか半信半疑でしたが、今や以前の状況に戻ったといえるのではないでしょうか。学会の懇親会などもマスクなしで「コロナ前」と同じ形式で開催され、報道でも話題に上ることもほぼなくなりました。陽性者はちらほら出ているようなので、感染そのものが完全に克服されたわけではないのでしょうが、ずいぶん景色が違って見えるものです。

ACS 日本支部の活動もほぼ「コロナ前」に戻りました。日本外科学会学術集会中に開催される日本支部会は５類以降直前でしたが、久しぶりに対面で開催され、ACS President の E. Christopher Ellison 先生も会場にこられ、直接講演していただけました。ありがたいことです。

また、2023 年の新フェローは 18 名でした。ACS 本会中に開催する恒例の情報交換会は 2023/10/23 に The Westin Boston Seaport District で開催され、約 50 名（米国からの参加、海外ゲストも含む）が参加され、昨年以上に盛況でした。当日は新しく ACS President に就任された Henri Ford 先生も来場され、スピーチもされ、2024 年の名古屋で会いましょう（第 124 回日本外科学会）と力強く宣言されていました。現職 ACS President が Japan Chapter の情報交換会に来られたのは私の記憶にもなく、大変光栄に思いました。新フェローとなられた先生方も国内の学会では得難い対面による国際交流の意義を実感されたのではないでしょうか。

今年の ACS 本会は 10 月 19 日～ 10 月 22 日、サンフランシスコで開催予定です。恒例の情報交換会は例年２日目にあたる月曜夜に開催するところ、ACS の会期が１曜日繰り上がることを受け、10/20 日曜の夜の開催を目指し計画しようと思っています。みなさん、サンフランシスコでお会いしましょう。

ACS日本支部事務局　長谷川潔
〒113-8655 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学肝胆膵外科医局内
TEL.03-3815-5411　FAX.03-5684-3989
e-mail:acsjpn-admin@umin.ac.jp

血漿分画製剤　薬価基準収載
ボルヒール®組織接着用
生体組織接着剤　BOLHEAL®　献血
特定生物由来製品　処方箋医薬品　注意-医師等の処方箋により使用すること
※効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については、添付文書をご参照ください。
製造販売元
KMバイオロジクス株式会社
熊本市北区大窪一丁目6番1号
販売元
一般社団法人
日本血液製剤機構
東京都港区芝浦3－1－1
［文献請求先及び問い合わせ先］
一般社団法人 日本血液製剤機構　くすり相談室　〒108-0023 東京都港区芝浦3-1-1
医療関係者向け製品情報サイト　https://www.jbpo.or.jp/med/di/
BOL-202312

抗悪性腫瘍剤／抗PD-L1注1)ヒト化モノクローナル抗体
生物由来製品、劇薬、処方箋医薬品注※)　薬価基準収載
テセントリク®点滴静注1200mg
TECENTRIQ® atezolizumab
アテゾリズマブ（遺伝子組換え）注
®F. ホフマン・ラ・ロシュ社（スイス）登録商標
注1) PD-L1：Programmed Death-Ligand 1
注2) VEGF：Vascular Endothelial Growth Factor（血管内皮増殖因子）
注※）注意－医師等の処方箋により使用すること
抗悪性腫瘍剤　抗VEGF注2)ヒト化モノクローナル抗体
生物由来製品、劇薬、処方箋医薬品注※)　薬価基準収載
アバスチン®点滴静注用 100mg/4mL 400mg/16mL
AVASTIN® bevacizumab
ベバシズマブ（遺伝子組換え）注
「効能又は効果、用法及び用量、警告・禁忌を含む注意事項等情報」等については、電子化された添付文書をご参照ください。
製造販売元
中外製薬株式会社
〒103-8324 東京都中央区日本橋室町2-1-1
ロシュ グループ
（文献請求先及び問い合わせ先）メディカルインフォメーション部
TEL.0120-189-706　FAX.0120-189-705
（販売情報提供活動に関する問い合わせ先）
https://www.chugai-pharm.co.jp/guideline/
2022年8月